

豊太郎はなぜ手記を書いたのか

テーマ設定の理由は僕は豊太郎がこれだけ長い手記を書いたということは何か目的があったからではないかと思ってそれをしりたくなったからです。

結論は手記を書いたのは豊太郎が相沢のことを憎んでいてそれを伝えるためにこの手記を書いたということです。そしてそれを本文からうかがえる豊太郎の性格や、相沢の行動からのと豊太郎とエリスの関係の2点で考えてみたいと思います。そして豊太郎が手記を書いている時の気持ちを考えてみたいと思います。

まず豊太郎の性格について、287ページの6行目の「友に対して否とは答えぬが常なり。」から分かるように豊太郎は友からの頼み事を断れないほど自分の意志の弱い人間であった。そして大学からの付き合いであった相沢はその性格を知っていたその上で相沢は豊太郎にエリスと別れるように行った、そして豊太郎は断ることができなかった。豊太郎は昔から自分の人生を自分の意志で決めたことがなく、幼い頃からの勉強も、大学の法学部に入ったことも、ベルリンに来たのもただ人がたどらせた道を一筋にたどっただけなのである。だからエリスと別れるときも相沢に言われた道をたどってしまった。そして相沢は大臣に豊太郎にはドイツに大切に思っている人はいないと嘘をついて、大臣がそのことを豊太郎に言った時には豊太郎の性格からして断ることができない状況であった。そして、そのことを聞いたエリスは精神的に死んでしまった。だから豊太郎はエリスを精神的に殺した相沢を非常に憎んでいる。それは舞姫の最後の一文からもわかる通りである。しかし、豊太郎の意志の弱さから豊太郎は直接相沢にこのことを伝えることができず手記という形で相沢にこの憎しみを伝えようとしているんだと思う。

しかし、どうして意志の弱いはずである豊太郎がこのような憎しみを伝える為の手記を書いたのか。そこで2点目である。エリスは豊太郎を家に住ませる時や豊太郎と一緒に日本に行きた

いと言ったときに、母の心を動かすくらい豊太郎に強い思いを持っていたことがわかる。つまりそれほどエリスは豊太郎のことを愛していたのである。だから子供が出来た時エリスはとても喜んだし豊太郎がロシアに行ったときは死にそうと手紙に書くくらい悲しんだ。そして豊太郎も同じくらいエリスを愛していた。なぜなら大臣の誘いを断れなかった日に豊太郎は2、3週間も寝込んでしまったからである。つまりエリスを大切に思っていた豊太郎が自分の性格のせいでエリスと子供を残して旅立ってしまうのを本当に悔やんだからだ。つまり豊太郎とエリスは互いに大切に思いあっていた。だから相沢のせいでこの愛が崩されたのを豊太郎は心の底から憎んだのである。

以上のことから豊太郎は相沢のことをとてもにくんでいるが自分では直接言うことができなくて手記という形で相沢に憎しみを伝えようとしているんだと思います。そしてこの手記を書いている時の豊太郎はエリスをととても愛していたことから今もエリスのことを心配し離れ離れになったことを悔やんでいるんだと思います。それと同時に相沢への憎しみが抑えきれず最後の一文に「一点の彼を憎む心今日までものこれりけり。」という言葉を残したんだと思います。

しかし豊太郎はこの深い心の悲しみは手記に書いてもなくなることはないと言っているのにそれを知っていてなぜ今までの自分ならやらなかったようなことをしたのか、という新たな疑問も出てきたのでこのことについてはまた機会があったら考えたいです。